

ヨーロッパに学ぶ

途中上海では、外国人によって牛馬のように鞭で使役される中国人労働者の姿を目撃します。英領香港、仏領サイゴンにも寄港し、欧米列強によるアジア侵略の現実に触れるとともに、それぞれの植民地を通しての英仏両国の国力の違いにも目を向けています。地中海と紅海を結びスエズ運河は開削中で、この大工事がフランス人セブプスを中心に、民間から資本を集めて行われていることにも注目します。

二月二十九日、マルセイユ到着。三月七日、パリ到着。三月二十四日、昭武、仏国皇帝ナポレオン三世に謁見、将軍慶賀より託された国書を奉呈。この謁見式には、栄一は陪席を許されていませんが、この後、観劇会や舞踏会、競馬見



▲フリユリ=エラール (渋沢史料館提供) 栄一は彼から銀行業・金融業を学びました

「...わたしがフランスに滞在中深く感じたことが一つあった。そ

銀行の制度や株式会社仕組みなど、栄一がヨーロッパで学んだものは、数々ありますが、その最大なものといえば、次のような栄一自身の言葉が参考になるのではないのでしょうか。



「...わたしが彼の地に比較して官尊民卑の弊が甚だしいことである。わたしはせめて実業界にだけでもこの弊を直してみたい。それには民業の発展が必要である。」 (雨夜譚会談話筆記)

ある日のことです。昭武のお守役のビレット大佐と幕府のパリにおける代理人である銀行家のフリユリ=エラールの二人が対談している場面に、栄一は出くわします。当時のわが国で言えば、ビレット大佐が侍で、フリユリ=エラールが商人です。侍のビレット大佐がふんぞり返っているかといえは大違いで、むしろ商人であるフリユリ=エラールの方が尊敬されているように見えたのです。栄一はこのことに大きな衝撃を受けました。(文：新井慎二)

物語の手引き

『パリ万博親善使節団 ~パリまでの道のり~』
使節団一行29人は、慶応3年1月11日横浜を出発すると、上海・香港・サイゴン・シンガポール・セイロン・アデンを経てスエズへ到着します。当時はまだ運河が完成していなかったため、スエズからは汽車に乗りアレクサンドリアへ。

そこから、地中海を渡る船に乗り換えマルセイユに上陸。その後、再び汽車に乗り換えるとリヨンを経て3月7日パリに到着しました。
『雨夜譚会』
渋沢栄一の回想談を記録するために、栄一の孫である渋沢敬三により企画された会です。大正15年10月～昭和5年7月まで、全31回開催されました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

心の叫びを詞に乗せ



福祉施設などでの慰問演奏や、地域のイベントで音楽活動をしている荒引定男さん。大好きな音楽で地域に貢献できたらと、自作の歌や、空手と和太鼓を融合させた独自の演奏を披露しています。

荒引さんは福島県双葉町出身。兄が都内でそば店を営んでいたことから、家族で上京。そば店で修行する傍ら、独学でギターを習得し、夜の街で10年ほど『流し』をしていたそうです。30代で福島県富岡町に移り、そば店『立花』を開業。余暇に慰問活動や障害者のかたへ太鼓の指導をするなど、約20年間『んだべー立花』の芸名でたくさんのかたと交流を深めてきました。

から新鮮な野菜を頂くなど、大変お世話になりました。深谷の人は本当に優しいですね。避難してしばらくは、歌う気になれなかったのですが、「お世話になった深谷のかたに感謝の気持ちを伝えたい」と、んだべー立花が再会しました。

「今はまだ悲しい歌しか歌えませんが、好きな歌を歌って過ごせるんだから幸せなのかもしれない。歌の力を借りて、地域に出ていき、皆さんと交流を深めたいです。」

荒引さんは心の叫びを詞に乗せ、今日も演奏を続けます。



▶「わんぱくの森コンサート」(3月24日、川本南小学校北側学校林で開催)では、両親・深谷市民へ感謝の気持ちを込めた歌や、故郷を思う歌を披露しました。

キラリ熱・中・時・間

～荒引定男さん～

平成23年3月の震災後、福島第一原発から約8kmの自宅を離れ、福島県内の避難所を5か所ほど転々とし、親族が住む深谷に行き着きました。

「一か田舎で、もへせい館で避難生活を送りました。地域の皆さん

ありがとうの手紙



最優秀賞
一般の部
ママへ

榎引 小林康弘さん

ママ、いつも家族のために働いてくれてありがとう。本来ならば一家の主であるパパが再び単身赴任を余儀なくされていましたが、「パパ、もう行かなくていいよ、家族みんなで暮らせた方がいいよ、子どもの成長は今しか見られないよ、その分、私が頑張るから。」と言ってくれましたよね。とても重みのある言葉で、決心ができました。

この時代、この歳になつての再就職は大変厳しかったけれど、家族一緒に暮らせることに幸せを感じています。ありがとう。

情熱農力



角田 裕也さん (32歳・後榛沢)

榛沢の味来と共に

榛沢のトウモロコシといえば『味来』。角田さんたち生産者が一丸となって『榛沢の味来』の味を守っています。その一翼を担うべく、26歳の時に就農。「以前より収入は不安定になったけど、刺激があつて面白い」と語ります。2年前には仲間と青壮年部を結成。小学校で収穫体験を指導するなど、PRにも積極的です。「1人でも多くの人に、『榛沢の味来』の味を知ってもらいたい」この気持ちが原動力となっています。